

イエズス会豊後府内教会の歴史概観

高田重孝

【改訂・2018年2月21日】

第1期・キリスト教の伝来

1551年（天文20）9月

ポルトガル船、デュアルテ・ダ・ガマ（Duarte de Gama）の船が豊後府内に来航した。船長はザビエルが山口にいることを知り連絡を取った。

豊後の国・府内より、山口で布教中のザビエルに宛て2つの書簡が届いた。ひとつは府内の沖の浜にザビエルの友人デュアルテ・ダ・ガマ（Duarte de Gama）船長からの手紙、もう一つはポルトガル人からザビエルが山口で布教活動をしているとの噂を聞いた豊後の若い大名、大友義鎮【後の宗麟】からのザビエルに宛てた招待状を送った。ザビエルは『ポルトガル人の友人に会うため、また、大名がキリシタンに成りたいのかどうかを確かめるために』、数日の間府内に行こうと決心した。ダ・ガマの船でインドからの手紙も届いているだろうと期待していたからでもある。そこでザビエルは、自分の留守中の山口の教会の世話をするために、トーレス神父を平戸から呼び寄せた。トーレス神父が9月10日に山口に着くと、ザビエルはベルナルドを連れて豊後に赴いた。ザビエルが期待していたインドからの便りは届いていなかった。ザビエルは大友義鎮との会見後、いったんデ・ガマの船でインドに帰り、そこでの状態を見て翌年に日本に戻るという計画を立て、それを山口のトーレス神父に伝えた。その後、11月20日、ザビエルはダ・ガマの船でインドに帰るために日本を後にした。大友義鎮は一家臣を使節としてザビエルに同行させ、ポルトガル国王宛の手紙と国王へ贈呈する具足とを携行させた。この使節はやがて入信して、ザビエルからロレンソ・ペレイラと命名してもらった。彼の本名は正確にはわかっていない。

1552年（天文21）

9月、ザビエルがマラッカから派遣した新しい宣教師たち、バルタサル・ガーゴ（Baltasar Gago）神父と二人のイルマン、デュアルテ・デ・シルヴァ（Duarte de Silva）とペトロ・アルカソーバ（Pedro de Alcacova）の3人が、通訳の日本人アントニオと共に、ゴアから鹿児島を経て豊後府内に到着した。大友義鎮の使節として、ザビエルと共にゴアに向かったロレンソ・ペレイラも一行とともに帰国した。豊後府内に着いたガーゴ神父は山口にいたトーレス神父に到着の報告を出し、トーレス神父の返事を持って、日本語の堪能なフェルナンデス修道士が、豊後に新しく到着した宣教師たちの手助けと通訳を兼ねて派遣されてきた。

12月3日、ザビエルがマラッカから派遣して豊後府内で布教活動をするために準備していた新しい宣教師たち、バルタサル・ガーゴ（Baltasar Gago）神父と二人のイルマン、デュアルテ・デ・シルヴァ（Duarte de Silva）とペトロ・アルカソーバ（Pedro de Alcacova）の3人

が、トーレス神父に挨拶するために山口に到着した。

12月25日、日本にいるすべての宣教師たちが山口に一堂に会し、この年のクリスマスは出来る限り厳粛に執り行われた。【日本で初めて行われたクリスマス】

1553年（天文22）

2月4日、豊後派遣組。 ガーゴ神父とフェルナンデス修道士が豊後府内に行き教会を開くために山口を出発。アルカソーヴァが同行した。

2月10日、豊後府内に帰還。

2月11日、豊後府内に教会のための土地が寄進される

大友義鎮を訪問した、ガーゴ神父とフェルナンデス修道士は、義鎮から自領内での宣教師保護と布教許可状を与えられた。それに伴って土地寄進状が与えられ、教会、宿舎、菜園および望むものすべてを作ることのできる地所が与えられた。

7月21日、豊後府内の“慈悲の聖母の教会”と教理学校

大友義鎮から、教会に最もよい土地が寄進され、建物の建設にはキリシタンたちが熱心に奉仕した。この土地に教会と修院が造られると、7月21日に落成式をした。教会の名前は“慈悲の聖母の教会・Nossa Senhora de piedade”と命名された。教会のシンボルとして大きな十字架一基が建てられた。地所内にはキリスト教徒たちを埋葬する墓地が定められた。

ガーゴ神父の指導のもと、フェルナンデス修道士が中心となって、子供たちに、キリスト教の教理を教える『教理学校』が設けられた。この学校の使命は、異教徒にキリスト教とは何かを教えて教会に来させること、教理を深く学んだ者たちに洗礼の準備をさせることと洗礼を授けること、洗礼を受けたキリシタンたちのキリスト教の真理の知識を深めさせ、キリシタンとしての確固たる生活を行わせることを目的とした教育であった。イルマン・フェルナンデスが教育を担当していた。

1555年（弘治元）

9月20日、アルメイダ、日本【平戸】に到着後、豊後に向かう

デュアルテ・デ・ガーマの船に乗って、ポルトガル人の医者で商人のルイス・デ・アルメイダ（Luis de Almeida・1525～1583）が平戸に着いた。アルメイダは修道士になって神に仕えるため、布教地として日本を選んだ。アルメイダは、治安の悪い所を3、4日掛かってガーゴ神父のいる豊後府内に到着している。アルメイダが豊後府内に着いたことを知らされたトーレス神父は、アルメイダがイエズス会に入会するにあたって、豊後教会に責任者であるガーゴ神父に対して、アルメイダに厳しい心霊修行を課すように命じ、その後イエズス会に入会を許可している。

晩秋の頃、アルメイダ、豊後府内に孤児院をつくる

イエズス会に入会後、アルメイダは豊後府内で行われていた嬰兒殺しの悪習を止めさせることであった。そのために孤児院の設立を、領主である大友義鎮に願い出ている。

豊後府内で活動を始めたアルメイダが、まず手掛けたのは孤児の収容施設だった。孤児院の運営はミゼリコルジア【慈悲の組】の組織で行われた。この孤児院はイエズス会が日本で初めて設けた社会福祉施設である。しかし、昼夜兼行で奉仕作業に従事したミゼリコルジアの男性組員たちの苦勞もつもの、折からの冬の寒さも加わり、嬰兒に下痢の症状が続発してアルメイダを悩ましたようだ。約 1 年後に、この孤児院は廃止され、それに代わって病院が創設された。

第 2 期・イエズス会布教本部の府内への移転と教会の拡張

1556 年（弘治 2）

4 月、トーレス神父一行、豊後府内に教会本部を移す。

ロレンソとバルナバを比叡山に送り出した後、山口の街に内藤・杉の内乱が勃発して混乱を極めたために、トーレス神父は豊後府内への避難を勧めていた山口の信徒たちの願いを聞き入れて、教会の機能のすべてを豊後府内に移した。

トーレス神父は府内に到着した時には重い病に罹っていた。山口での 5 年の活動の実りを毛利元就によって潰されるのを見るのは辛かった。府内でしばらく静養を取った後、新しい府内の地でトーレス神父は教会活動と新しい宣教師の育成を続けた。

ロレンソ、パウロ・キョウゼン、アルメイダ、イエズス会に入会する

ザビエルが最初のキリシタンに洗礼を授けたが、トーレス神父は初めて日本人をイエズス会に引き受ける人となった。府内に於いてトーレス神父は 3 人をイエズス会に迎えた。盲目の琵琶法師だったロレンソ、大和の国の多武峰という有名な寺の僧侶で医者 of キョウゼンとポルトガル人のルイス・デ・アルメイダの 3 人。トーレス神父は管区長ではなかったので、教会法ではイエズス会に入会を許可する権限を持っていなかった。実際にはトーレス神父が彼らの入会を許可し、2 ヶ月後の 7 月に府内に到着したメルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）管区長が、トーレス神父が許可したことを承認した。

7 月初旬、日本とインドのイエズス会管区長・メルキオール・ヌニェス府内に到着する

1556 年 7 月初旬、フランシスコ・マスカレーニャスの船が府内に入港して、管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）とガスパール・ヴィレイラ（Gaspar Vilela）神父、および二人のイルマン、ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が到着した。この中の 5 人はゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』にもっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。

府内で始まる音楽訓練

ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が府内に到着した。この中の 5 人はゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』にもっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。ギリエルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が中心となり、早速、府内の子供たちに音楽の訓練が始まった。この成果は、同年（1556 年）のクリスマスと翌年 1557 年の 4 月、受難週とそれに続く復活祭で、二つの聖歌隊が組織され、歌ミサが挙げられた。

11 月 教会活動の再開

1556 年 7 月初旬に豊後府内に来たフランシスコ・マスカレーニャスの船は 3 ヶ月余り府内に停泊していた。管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）は自分が乗ってきた船に乗ってマカオに帰って行った。

トーレス神父の補佐を始めたヴィレラ神父は『11 月に私たちは説教やそのほかの仕事を続行し始めました』と報告している。

アルメイダの病院のための土地の購入

『1556 年の秋（11 月 1 日）、ヌニェス神父たちが豊後よりインドに帰帆してからは府内もようやく静穏になりました。（中略）そこで、私たちは大友殿から広き良き地所を購入しました。この土地の中にはもっとも良き杉材で造られた数軒の家もありました。』

* 1557 年 11 月 7 日付け、コスメ・デ・トーレス神父の書簡、

1553 年に大友義鎮より寄進されていた地所の隣接地を、義鎮の承諾を得て購入し、土地をならし義鎮から贈与された義鎮の元屋敷数軒を解体して、その資材で 200 名を収容できる教会を新築した。11 月 1 日、落成式を執り行った。

これ以後、それまでの地所を「下の地所」、新たに購入した地所を「上の地所」と称した。新たな「上の地所」は樹木や竹林に取り囲まれていた。この 1556 年の教会敷地の拡大によってイエズス会府内教会の地所が確定した。この教会の整備は山口から豊後府内にイエズス会本部が移転してきた結果である。

府内における病院と墓地

1557 年（弘治 3）病院の増改築

「下の地所」に病院が造られる。その時「下の地所」は病院と墓地に区切られ、病院は、内科、外科、癩病（ハンセン氏病）患者等の 3 つに分けられた。更に同じ敷地内に「貧者の家」を作っている。

1559 年（永禄 2）

「下の地所」で大掛かりな病院の改造が続き、7 月 1 日、病院は新築された。働く人たちのための住宅が作られ、ミゼリコルジアの会員 12 名の家族が病院の周囲に居住して、貧者や病院の世話をして奉仕している。ほぼ、教会施設と付属の病院の造築は完了した。

墓地に関して

『キリスト教徒たちの葬儀は、慣例となっている教会での諸儀式を終えた後、最前に掲げた十字架を持って出発し、次に遺体がつづきます。キリスト教徒全員が市外の特定の場所にある墓穴に赴いて、そこに埋葬します。ここ豊後の府内には平戸および山口のキリスト教徒が所有しているような墓地を私たちは持っていないからです。』

* 1561 年 10 月 8 日付け、ジョアン・フェルナンデス修道士の書簡

「下の地所」の墓地は、一般のキリシタンを葬るための墓地ではなく、彼らは府内郊外のキリシタン専用の墓地に埋葬されていたようだ。「下の地所」の病院に付属する墓地には、1553 年に作られた育児院で養育されていて、死んだ幼児や小児、後の病院で死去した患者、慈悲院に仮住まいしていた者たちや教会関係者が埋葬されていたと思われる。

中世大友府内町跡発掘調査から

イエズス会史料によれば、1553 年（天文 22）に初めて建設された豊後府内の教会の敷地内にすでに墓地が設けられたとの記述がある。イエズス会は 1556 年（弘治 2）に、隣接する敷地を新たに購入して、1557 年（弘治 3）に当所の敷地を病院と墓地に 2 分している。教会と病院の敷地内の墓地は初めから一貫して教会敷地内に存在していた。

『府内古図』が伝わっていて、その古い地図によれば教会のあった場所は、大友館の背後にあたり、寺院が集中する南北街路に面して『ダイウス堂』と記載された敷地がある。その場所はイエズス会の記述の場所と一致している。現大分市顕徳町付近である。

2001 年（平成 13）3 月、JR 大分駅の高架化に伴う中世大友府内町跡の発掘調査で、教会跡推定地の発掘調査が行われた。JR 日豊本線線路下から、1 基の墓が発見された。頭を北に向け仰向けに足を延ばし伸展葬の人骨が、長方形の木管に納められていた。その後この周辺から合わせて 18 基の墓が発見され、教会の墓地の一角と断定された。この墓地の位置は教会推定地の南端にあたり、調査が進むにつれて 1590 年代の地層で覆われた 1500 年後期の埋葬であることも判明した。この発掘調査の結果、墓地の継続時期がイエズス会の史料からわかる教会の存続期間と一致すること、古図研究に基づく教会推定地と発掘された墓地との位置が一致することから、発掘された墓地は豊後府内のイエズス会府内教会の敷地内に設けられた墓地の一部と断定された。

府内古図の街並み

府内古図に描かれている府内は、『大友館』を中心に、碁盤の目状に東西に 5 本、南北に 4 本の街路が通り、38 カ所の町名と 20 カ所の寺社名が記載されている。

この地図は府内古図と現在の大分市地図を重ね合わせて、南北の街路を東の大分川沿いから第 1 南北街路、第 2 南北街路、第 3 南北街路として、最も西側の街路を第 4 南北街路と仮称している。さらに東西に走る街路については現『名ヶ小路町』は『名ヶ小路』、『横小路町』は『横小路』とそれぞれ町名にちなみ、街路名としてある。

大分川沿いの第 1 南北街路沿いには『上市町・工座町・下市町』等の町名があり、この場所は商工業者が居住して活動した場所と想定できる。大分川沿いには第 1 南北街路を遮断するように府内最大の寺院である『万寿寺』があり、その南に寺小路町がある。

大友館の東北側の第 2 南北街路沿いには『唐人町』があり、中国大陆や朝鮮半島出身の異国の人が居住していたと考えられている。

更に、第 4 南北街路沿いにある中町の裏には『ダイウス堂』と記載されたキリシタン教会の場所があり、その名称は『デウス』と当時呼ばれていたキリストを表わしていて、この場所にキリシタン関係の施設が建ち並んでいたことが推測され、発掘調査によっても、この場所がキリシタン施設であったことが確認されている。

第 4 南北街路沿いの『上町・中町・下町・林小路』大友館前の『御所小路町』や『御内町』等は、大友氏の家臣団が居住していた武家地区と考えられている。

賢順も大友宗麟よりこの武家地区に館をもらい居住していたと考えられる。

1556 年 12 月、クリスマス（降誕祭）

『降誕祭が近づくと、我らは村々のキリシタンにその日取りと、全員が参集することを伝えさせた。市のキリシタンのほかに、八乃十里の多数の地区から大勢のキリシタンが降誕祭の夜のミサに訪れ、その余りの多さに故に修道院、すなわち教会と我らが宿泊している家々、さらにもう一方の地所にある教会にもほとんど入りきれなかった。我らは降誕を讃える数多くの歌とそれに関する説教により、ミサを執り行ったほか、終夜、説教をした。』

* 1557 年 10 月 29 日付け 平戸発、ガスパル・ヴィエラ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 期第 巻 252 頁

1557 年（弘治 3）

3 月、受難週と復活祭

前年 7 月から、新しい音楽の指導者のもとで訓練を積んだ子供たちと新しい信徒たちの音楽教育も進んで、典礼聖歌が理解され唱和されるようになってくると、当然、聖歌隊が組織され、ミサでの司祭の応答が歌でなされるようになってきた。イルマンや同宿たちだけでなく信徒達を訓練した聖歌隊がいつどこで一番早く組織されたかは、必ずしも明確にはイエズス会の記録

からは確認できない。しかし、この年 1557 年に府内の教会では、すでに聖歌隊が組織されていてミサを始め諸儀式はすべて歌唱を伴って行われていたようである。この年の枝の主日には、二組の聖歌隊が組織されていて、それに滞在中のポルトガル人数人と、5 人ずつの聖職者も加わり、相当数の人々によって合唱がミサの中で歌われたことが記録からわかる。

『歌ミサの後十字架を捧げてプロシッサン（行列）を行ったのち、神父は十字架と共に聖堂の外に留まり、われわれは中に入って戸を閉じて唱った。そして神父が門を開けと言った時、聖堂内において「オルガンの歌」で、大きな信心をこめて三回応唱して、戸を開き、すべてに人々は大きな喜びに満たされた。行列をしてから聖壇に進み、ミサを始め、御パッション（受難）の時となって、歌声は盛り上がった。われわれは聖務日課 officios すべてを歌唱して行ったが、水曜日には挽課 treuas を唱い始めると、二つの聖歌隊には同地において冬を過ごしたポルトガル人数人も参加した。定刻となってオノオノ人ずつ聖歌隊に加わり跪いて高声に歌唱した。オルガンの歌のベネディクトゥス Benedictus をもってプサルモス Psalmos(詩篇歌)を終り、つぎにミゼレーレメイデウスを唱ったが、その時、聖堂内にいた沢山のキリシタンらは多くの涙を流し信心を表わした。』

* 1557 年 10 月 29 日付け、平戸発 ガスパル・ヴィエラ神父の書簡

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 期第 巻 255～260 頁

1560 年『イエズス会士により医学研究、教授、施術を禁止する決議』

イエズス会士の医療活動は禁止され、病院の全てを担っていたアルメイダ医師は、宣教師として布教活動に専念することとなった。アルメイダの修道士としての布教活動の専念に伴い、今まで繁栄をしていた府内教会の病院及び育児院、慈悲院は、府内教会員による慈悲の組・ミゼリコルジアの会員によって維持運営されるようになっていった。

1560 年を最後にポルトガル船の豊後來航はなくなり、2 年後の 1562 年（永禄 5）、イエズス会本部の肥前横瀬浦への移転に伴い、豊後府内在中の宣教師数も減少して、豊後における活動は徐々に下火になった。

第 3 期・府内教会の停滞期（1562 年～1577 年）

1562 年（永禄 7）7 月、イエズス会本部、肥前の横瀬浦に移る

府内にあったキリスト教団本部は肥前の横瀬浦（現在・長崎県西海町）に移っていった。

イエズス会本部の肥前横瀬浦への移転に伴い、豊後府内在中の宣教師数もイルマン 3 名だけになり、豊後における活動は徐々に下火になった。デュアルテ・ダ・シルヴァ、ギリエルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェスの 3 名の修道士が府内には残り府内の教会及び病院の責任を負った。3 名の修道士の指導のもと、府内教会は一教会としてその敷地と施設、病院と慈悲院等を維持していたと思われる。イエズス会の豊後府内から肥前横瀬浦への移転は、大村の領主・大村純忠がイエズス会に対して、新しい布教地として横瀬浦を全面的に提供して、大村純忠自身も洗礼を受けて布教活動を支援する約束が取り交わされたためであった。

横瀬浦は1年半の間繁栄を極めたが、1563年11月下旬、短い使命を果たして焼失した。

大友義鎮入道して『瑞峯院三非斎宗麟』と号する

1562年（永禄5）5月30日 大友宗麟 33歳 諸田賢順 28歳

京都大徳寺（臨済宗大徳寺派）に塔頭（子院）瑞峯院を建立。京都の大徳寺から怡雲宗悦（いんそうえつ）という高僧を招き、怡雲宗悦のために『臼杵の御殿と城に向かい合った』（フロイス・日本史）位置、臼杵城（丹生島・にうじま）の北側、臼杵川が流れ込む臼杵湾を隔てた対岸の北側の臼杵の諏訪山に大きな禅宗寺院を建立した。この寺が『紫野壽林寺』であり、この寺で大友義鎮（33歳）は入道して『瑞峯院三非斎宗麟』と号する。

『壽林寺』は現在の臼杵市諏訪地区にあったことが江戸時代中期に著かれた『臼陽寺社考』などから推定されている。壽林寺は1586年（天正14）島津軍臼杵侵攻直後、あるキリシタン女性の放火によって全焼したことがフロイスの記録にある。壽林寺跡には江戸時代臼杵藩別邸が建てられていた。大友宗麟は臼杵を城下町として整備して、臼杵の丹生島に城を築き、臼杵が大友氏の政庁所在地となった。

『紫野寿林寺』現在地：臼杵市諏訪地区。臼杵大橋の袂付近一帯の諏訪地区・大橋あたり

大友義鎮の得度式において、*諸田賢順は箏を弾じ宗麟の得度式をより一層厳粛な場に整えた。善導寺でのみ演奏されていた『善導寺楽・筑紫箏』がこの式典にも鳴り響いた。

大友宗麟は以前から賢順（28歳）の才能を認め、大友家の楽士として取立てきた。また賢順の箏に対する情熱に理解を示して、勉学の機会を事あるごとに与えてきたが、今回、使節の楽士としての大役を果たし、正親町天皇の前で御前演奏をして禁廷より『筑紫懸』『賢順懸』と号を賜るほどになった賢順に対して、大友宗麟も賢順に褒美を与えることにした。

1563年、ジョアン・バプティスタ・デ・モンテ神父が府内教会の責任者として赴任してきた。イルマン、デュアルテ・ダ・シルヴァはモンテ神父と交代で1563年以降は宣教師として肥後の川尻（現・熊本市川尻）へ派遣された。府内教会は、1神父ジョアン・バプティスタ・デ・モンテ神父、2修道士ギリエルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェス体制が1574年（天正2）まで続いた。

1563年8月15日、聖母被昇天の祝日、日本布教長トーレス神父の盛式誓願式挙行のために、アイレス・サンチェスが府内から5,6名の少年達を率いて肥前・横瀬浦（現・長崎県西海町）まで出張して参加している。前夜の聖務日課（晩課）には、少年達が歌い、フロイスが祈り（オラショ）を唱え、当日は歌ミサが挙行された。

『このイルマン・サンチェスは少年達に自らヴィオラ・ダルコを教えこみ、彼らはすでにミサ付えもでき、またかなり上手に演奏も出来た。』フロイス1563年11月14日付けの書簡
横瀬浦は1年半の間繁栄を極めたが、1563年11月下旬、短い使命を果たして焼失した。

1564 年 4 月、避難先の肥後高瀬（現・玉名市）でイルマン・デュアルテ・ダ・シルヴァ死去。
 1564 年 6 月、トーレス神父、島原口之津へ移住。イエズス会の仮の本部を口之津教会に置く。

1565 年（永禄 8）臼杵教会（永禄の教会）完成。

1567 年、イエズス会布教本部は長崎に移された。

1574 年 2 月、宗麟、嫡男義統に家督を譲る。フランシスコ・カブラルが豊後に来る。

大友家からキリシタンになった人々

1575 年 7 月頃、一条兼定と夫人（大友宗麟の長女）の受洗

1575 年 11 月、大友親家（大友宗麟の次男）と宗麟の娘 2 人の受洗

1575 年 12 月、大友宗麟次男・親家洗礼を受け、ドン・セバスティアンと称する。

1577 年 4 月 8 日、老臣田原親堅の養子親虎、洗礼を受け、ドン・メシアンと称する。

第 4 期・府内教会の最盛期とコレジヨの開設（1578 年～1586 年）

1577 年（天正 5）7 月、長崎に 14 名の宣教師が来日した。

そのうち、ペドロ・ラモン、ゴンサロ・レベロ両神父と 6 名の修道士が豊後に配置され、ラモン神父は府内の司祭館の上長に任命されている。当時の布教長カブラルは、来日前の巡察師ヴァリニャーノによる神学校開設の命令を受けて、その準備のために府内教会にラモンと多くの修道士たちを配置したと考えられる。

日向・伊東氏の崩壊

1577 年(天正 5) 12 月 7 日、日向伊東氏、薩摩軍に攻められて日向の所領を捨て『都於郡崩れ』『豊後落ち』

1578 年 1 月中旬、大友宗麟の庇護を受けて豊後野津の到明寺【キリシタン寺】に落ち着く。

1578 年のイエズス会の教勢

在日イエズス会員 51 名、神父 21 名、修道士 30 名。

京都	神父 2 名、修道士 3 名
筑前博多	神父 2 名、修道士 1 名
肥後天草	神父 3 名、修道士 1 名
肥前口之津	神父 1 名、修道士 1 名
肥前大村長崎	神父 3 名、修道士 3 名
肥前平戸	神父 2 名

豊後府内 神父 4 名、修道士 13 名
 豊後臼杵 神父 2 名、修道士 6 名

1578 年の時点で、豊後府内にはイエズス会宣教師のほぼ半数が居住している、その中でも府内教会には最も多い 17 名のイエズス会員が在籍している。

1578 年 7 月 25 日、臼杵教会で、大友宗麟は洗礼を受けドン・フランシスコと称した。

宗麟の新婦人、およびその子も受洗

野津の『リアン』が洗礼を受け、野津で 100 名以上がキリシタンになる

同年 11 月 12 日、大友軍は日向に出兵、島津軍と戦い、高城・耳川の戦いで大敗を期した。

1579 年 4 月 大友宗麟、伊東義佑（三位入道）佑兵一行たちを道後へ逃がす。伊予国・河野氏は宗麟の次姉の嫁ぎ先であり、宗麟は河野氏に伊東氏達の保護を託したと考えられる

1578～79 年頃？ 野津の『リアン』が自宅敷地内に教会を建て、その裏山に大十字架と下藤村のキリシタンのために広く良く整った墓地を整備する【下藤地区キリシタン墓地】

伊東義賢(16 歳)、祐勝(14 歳)、母・阿喜多、受洗

伊東マンショ、弟・勝左衛門(ジュスト)、母・町の上、受洗

マンショ受洗後に府内の教会学校【仮のコレジオ】に入る

（洗礼名・マンショとは、ポルトガル、エヴォラの街の殉教者の名前）

1579 年（天正 7） 巡察師ヴァリニャーノが来日。

1580 年（天正 8）

巡察師ヴァリニャーノが臼杵に滞在、豊後地区のイエズス会士が臼杵教会に集合して協議会を開催する。

イエズス会の日本布教組織を再編した。長崎に本部を置き、そこに日本布教長が常駐して、日本を都、豊後、下の 3 地区に分割した。豊後地区は 1580 年に新しく設置された府内コレジオ院長のラモンが就任した。

1580 年 4 月 有馬のセミナリヨ開校、第 1 期生として伊東マンショ等 22 名入学

12 月 臼杵に修練院【ノビシャード】が開校して 12 名が入学する

1580 年（天正 8）ロレンソ・メシア神父の豊後よりの報告に府内病院の様子が記されている。

『わずかに癩に罹り遺棄された者を治療して、彼らを救助して帰依した者が教会の信徒になった』と記載されている。この頃には府内病院の機能はほとんど停止していたと推測される。

1581 年（天正 9）府内にコレジオ【学院】が開校する

宗麟、臼杵に日本で最も美しい教会（天正の教会）を建設する

***臼杵教会に日本初のポジティブオルガンが設置される**

1582 年 2 月 20 日、天正遣欧少年使節、長崎を出帆する

1582 年、親盛（宗麟の三男）受洗、ドン・パンタレアンが洗礼名

1585 年、志賀親次（親善）19 歳、受洗

1586 年（天正 14）大友宗麟、島津軍の豊後侵攻を防ぐために、大阪城に赴き豊臣秀吉に救援を要請

1586 年（天正 14）末、島津軍の豊後侵攻に伴い、臼杵の教会施設、府内の教会施設、細々と活動をしていた病院等は壊滅的被害を受けた

大友宗麟、臼杵の城下住民を臼杵城に避難させる

野津の『リアン』が野津のキリシタン 3000 人を鍋田城に避難させる

臼杵教会ではラグーナ神父が残り、全員下関へ避難する

臼杵教会が豊臣方の仙石秀久軍により破壊される

府内教会の終焉

1586 年（天正 14）末、島津軍の豊後侵攻により壊滅的被害を受けた府内の町だったが、宣教師たちが山口へ退去した後の教会施設は、豊臣秀吉の使者・*木喰応其上人【興山応其上人】の宿舎になっていたために、島津軍は火を掛けなかった。府内に入った、キリシタン武将・黒田如水孝高のとりなしにより、教会施設はイエズス会に返還され、そこにレベロ神父が入ったが、占領した豊臣軍による略奪が絶えなかった。さらに羽柴秀長の軍勢が到着して、宿舎として教会施設は接收された。辛うじて修道院と倉庫は残ったが、教会堂は破壊された。

***木喰応其上人【興山応其上人】** 1536～1608 年、安土桃山時代の真言宗の僧

応其は、元は近江の武士であり、姉川の戦いに参戦、その後、戦いの愚かさと人生の無常を感じて出家した。1585 年（天正 3）秀吉の紀州攻めの時、精強な鉄砲部隊を持つ根来衆・雑賀衆が攻略され、次は高野山が目標とされた時に、高野山の客僧であった応其に全権を託されて、応其が秀吉の本陣の粉川寺へ和議に赴いた。応其は交渉に際して誠意を尽くして説得を続け、秀吉に深い感銘を与え、秀吉から信頼を受けた。応其は和平交渉の条件として、高野山の僧兵の武装解除と高野山の領地をすべて献上した。これに対して、秀吉は逆に 2 万 1000 石の寺領を高野山に認めている。このうち、半端な 1000 石は応其個人に与えられた俸禄であり、この

地が本市の中心地となった『橋本』で、1587 年（天正 15）に本市の里にあった荒れた寺を再建して定住、応其屋敷と呼ばれ、この屋敷が後に『応其寺』になった。

その後、応其は秀吉により高野山を統べる人物として指名された。秀吉の生母・大政所の供養として高野山に青巖寺（後の金剛峰寺と改名）を建立し、その他の諸堂の修理、荒れていた高野山を天下の菩提所として再整備を行った。秀吉の行った土木工事のうち約百ヵ所の道路や橋、用水等の整備修復を行った。

1595 年（天正 13）『薩摩旧記雑録』には、応其が秀吉の全権使者として薩摩との交渉に大きな役割を担っていたことが記録されている。秀吉の九州征伐は、島津の九州統一を目前に、豊後の大友宗麟が秀吉に助けを求めたことに始まる。1597 年（天正 15）3 月、応其は一色昭秀と共に薩摩に最終交渉に赴いたが、交渉は決裂して、秀吉が 20 万を超える大軍を率いて九州侵攻を開始、4 月、豊臣秀長・黒田官兵衛率いる 8 万の部隊と、日向高城の根白坂で戦い、薩摩との決着がついた。この時点で、応其は一色昭秀と再度講和交渉に向かったが、降伏を潔しとしない島津義弘は抵抗を続けた。しかし、最終的には薩摩は無条件降伏を行っている。

応其の働きは具体的な戦功として現れるものではないが、戦いの長期化での人材や物質の損失等を考えれば、和平交渉の中での応其の役割の重さを認識させられる。

1587 年 3 月 20 日、大友義統（宗麟の嫡子）一家の受洗（中津において）

1587 年（天正 15）6 月、大友宗麟、津久見で死去。

同年 7 月、豊臣秀吉が『伴天連追放令』を博多の箱崎宮で発布。それに伴い豊後に残っていた宣教師 3 名は長崎に退去した。この後、府内教会は放棄され、再建されることはなかった。

高田重孝

880-0035 宮崎市下北方町横小路 5886 - 3

0985・25・5467 Fax 0985・22・3628 携帯 090・5933・4972

Email Shige705seiko214@outlook.jp.